

啓蒙専制期ハプスブルク君主国における批判的公共圏の成立 —フリーメイソン勅令をめぐるパンフレット議論に基づいて—

上村 敏郎

目次

はじめに

1. ハプスブルク君主国における国家と協働する啓蒙とフリーメイソン
 2. ウィーンのフリーメイソン：イグナーツ・フォン・ボルン
 3. ヨーゼフ 2 世のフリーメイソン勅令
 4. パンフレットに見るフリーメイソン勅令—皇帝批判の開始
- おわりに

はじめに

ハプスブルク君主国の啓蒙専制期を代表するヨーゼフ 2 世は、検閲政策や警察制度を駆使して、言論を統制し、世論をみずからの改革を支持するように誘導しようと試みた¹。彼は公的には言論の自由を認めつつも裏では監視の目を光らせるという一見矛盾した状態を生み出した。こうした政策を本稿では言論紀律化政策と呼びたい²。つまり、検閲法も警察制度も言論活動を国家の思惑の

中でおこなわせる、あるいは国家の基準に基づいて一体化させる装置として機能していたということである。こうした言論紀律化政策を最も象徴する法令が 1785 年の暮れに発布された。いわゆるフリーメイソン勅令と呼ばれるものである³。ヨーゼフ 2 世は国内に広がっていたフリーメイソンを国家の監視下に置こうとした。しかし、当然ながらヨーゼフ 2 世のこうした施策では完全に言論を紀律化することはできなかった。

本稿ではこうした過程を分析するにあたって「公共圏」という概念を使用したい。公共圏概念はハーバーマスの『公共性の構造転換』以来歴史学においても繰り返し議論の俎上に上がっているが、本稿ではこの概念を「私人として集まった公衆がコミュニケーション行為を通じて国家と対峙して形成する言論空間」として規定する⁴。複合国家であるハプスブルク君主国においては、地域や言語によって公共圏の発達の度合いや性質に当

¹ ヨーゼフ 2 世の検閲政策や警察制度については以下の文献を参照のこと。上村敏郎「18 世紀末ウィーンの出版文化—ゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーの出版活動を例にして—」『史境』第 57 号 (2008)、37-56 頁、同「ヨーゼフ二世治下ハプスブルク君主国における「批判の自由」と言論紀律化—セーケイ事件をめぐるパンフレット騒動—」『社会文化史学』55 (2012)、51-82 頁、同「18 世紀末ハプスブルク君主国における出版と統制—ウィーン書籍商ヴーヘラーの廃業処理を例にして—」『史境』第 66 号 (2013)、43-61 頁。

² 紀律化という言葉はゲルハルト・エストライヒが国制史・社会史的な観点から啓蒙絶対主義を説明する際に使用した言葉であり、彼はブルードンの言葉を引用して紀律化の全作用を次のように述べている。紀律化とは「統治されていること、つまり行政の監督下に置かれて、検査され、スパイされ、指導され、やたらと法律を課せられ、規制され、型にはめられ、教化され、説教され、コントロールされ、評価され、検閲され、指揮されること……、ありとあらゆる高位・仕事・活動が記帳され、登録され、リストにのせられ、査定され、捺印され、測定され、評価され、課税され、免許され、認可され、委任され、推薦され、警告され、阻止され、改革され、調節され、処罰される」ことである。ゲルハルト・エストライヒ「ヨーロッパ絶対主義の構造に関する諸問題」成瀬治編訳『伝統社会と近代国家』233-258 頁。

³ フリーメイソン勅令については以下の文献に全文収録されている。Helmut Reinalter (Hrsg.), *Joseph II. und die Freimaurerei im Lichte zeitgenössischer Broschüren*, (Wien/Köln/Graz, 1987), S. 64-66.

⁴ ユルゲン・ハーバーマス『[第 2 版] 公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄・山田正行訳、未来社、1994 年。また、ハーバーマスの公共圏 (公共性 Öffentlichkeit) 概念の理解に際して、筆者は花田達朗『公共圏という名の社会空間—公共圏、メディア、市民社会—』木鐸社、1996 年、花田達朗『メディアと公共圏のポリティクス』東京大学出版会、1999 年を参考にしている。ハーバーマスに対する批判は多岐にわたるが、邦語で参照できるものとしては、クレイグ・キャルホーン編『ハーバーマスと公共圏』山本啓、新田滋訳、未来社、1999 年。ドイツ近世史における公共圏概念に対する批判的受容の成果は、アンドレアス・ゲシュトリヒやアンドレアス・ヴュルグラーによる研究に見られる。Andreas Gestrich, *Absolutismus und Öffentlichkeit: Politische Kommunikation in Deutschland zu Beginn des 18. Jahrhunderts*. (Göttingen 1994); Andreas Würzler, *Unruhen und Öffentlichkeit: Städtische und ländliche Protestbewegungen im 18. Jahrhundert*. (Tübingen 1995); Andreas Gestrich, *The Early Modern State and the Public Sphere in 18th Century Germany*. In: Peter-Eckhard Knabe (Hrsg.), *Opinion*. (Berlin 2000), S. 1-13; Andreas Würzler, *Veröffentlichte Meinungen – öffentliche Meinung. Lokal-internationale Kommunikationsnetze im 18. Jahrhundert*. In: Peter-Eckhard Knabe (Hrsg.), *Opinion*. (Berlin 2000), S. 101-135.

然差違が生じる。本稿の問題関心に沿ってここではウィーンの「ドイツ語」の公共圏に限定して話を進めたい。というのも、啓蒙期のハプスブルク君主国の知識人たちの間では早くからドイツ語によるコミュニケーションが進んでおり、ハプスブルク君主国の外にあるドイツ語圏の「文芸共和国」と連動しながら、一定の批評機能を持ちうる言論空間を成立させていたからである⁵。

ハプスブルク君主国において文芸的公共圏から政治的公共圏への機能転換がいつ起こったのか、少なくともドイツ語を基盤とする公共圏においては、1781年の検閲緩和がきっかけになったと考えられる。これにより「雪解け陽気」にたとえられるほどウィーンでは言論活動が活発になっていった⁶。しかし、ヨーゼフ2世は言論紀律化政策の一環として秘密裏に一部の知識人に改革支援のためのパンフレットを書かせて、この新たに形成された公共圏に介入を試みている⁷。多くの啓蒙知識人とヨーゼフ2世の政策が反カトリック教会という点で一致している間は、皇帝の改革政策に公論が正統性を付与するという形で公共圏と皇帝が協働関係にあったが、ひとたび皇帝と知識人との間にずれが生じると、知識人たちは皇帝の政策に対して批判を開始した。公共圏上で知識人が皇帝の政策を検討し、批判を開始するきっかけとなったのが、

⁵ ハプスブルク君主国における公共圏の議論は、主にボヘミアにおけるチェコ語の公共圏について、篠原がチェコにおける「国民社会」の成立にからめて論じている。篠原は公共圏におけるコミュニケーションの特徴を「普遍的な規範性」をもつとともに「ヨーロッパ近代の特定の歴史的文脈から生まれた、1つの文化の型」として規定し、19世紀における「国民社会」の成立（19世紀半ば）を起点にチェコ国民社会という文化の型に沿った公共圏を考察しており、非常に示唆的である。篠原琢「文化的規範としての公共圏—王朝的秩序と国民社会の成立」『歴史学研究』781号（2003年）、16-25頁。しかし、ドイツ語を共通のコミュニケーションコードとする公共圏に関しては、ハプスブルク君主国で使用された他の諸言語よりも先行して成立していたと考えるのが妥当であろう。ただし、18世紀末に成立した批判的公共圏の担い手は、多種多様な層から構成されており、単純に「市民」あるいは「国民」という言葉でまとめることはできない。

⁶ Leslie Bodi, *Tauwetter in Wien. Zur Prosa der österreichischen Aufklärung 1781-1795*, (Wien 1995²).

⁷ ヨーゼフ期のパンフレットに関する研究は、すでに注で挙げたBodiに加えて、Ernst Wangermann, *Waffen der Publizität: Zum Funktionswandel der politischen Literatur unter Joseph II.* (Wien 2004)が挙げられる。ヴァンガーマンはその著書の中でいくつかのパンフレットが政府の指示によって書かれていたことを論証している。

本稿で扱うフリーメイソン勅令であったと考えられる。

本稿では、最初にハプスブルク君主国における啓蒙が一体どのようなものであり、フリーメイソンとどのような関わりを持っていたのかを確認し、次にイグナツ・フォン・ボルンを例にウィーンのフリーメイソンの特徴を概観し、最後にヨーゼフ2世が發布したフリーメイソン勅令およびそれをめぐるウィーンの言論空間の議論を追っていくことで、啓蒙とフリーメイソンをめぐるハプスブルク君主国の言論活動の有り様を描き出し、1785年12月に出たフリーメイソン勅令がウィーンの公共圏に与えた意味について考察したい。

1. ハプスブルク君主国における国家と協働する啓蒙とフリーメイソン

18世紀のハプスブルク史における啓蒙とフリーメイソンと国家との諸関係を扱った研究は、オーストリアの歴史学界においてヘルムート・ラインアルターが中心となって基盤を築いているものの⁸、日本ではバラージュ・エーヴァの『ハプスブルクとハンガリー』の他、紹介されていない⁹。

⁸ ラインアルターが中心となって編集している雑誌『国際フリーメイソン研究雑誌』(*IF – Zeitschrift für Internationale Freimaurer-Forschung*)、「ヨーロッパのフリーメイソンに関する史料と叙述」(Reihe: Quellen und Darstellungen zur europäischen Freimaurerei)シリーズ(既刊16巻)ならびに『1770年から1850年までの期間の中央ヨーロッパにおける民主主義運動』国際研究所の書籍シリーズ(Schriftenreihe der Internationalen Forschungsstelle "Demokratische Bewegungen in Mitteleuropa 1770-1850") (既刊48巻)も重要である。本稿でも後者のシリーズの一環として刊行された次の研究書を利用している。Helmut Reinalter (Hrsg.), *Die Aufklärung in Österreich. Ignaz von Born und seine Zeit*, (Frankfurt am Main 1991)。18世紀のフリーメイソン研究におけるラインアルターの問題関心は、主に中央ヨーロッパにおけるフリーメイソンとジャコバン派などの過激啓蒙思想がどのように接続していたかという部分にあると思われる。

⁹ H・バラージュ・エーヴァ(渡邊昭子、岩崎周一訳)『ハプスブルクとハンガリー』成文社、2003年。また、そのほかにハプスブルク君主国における啓蒙とフリーメイソンの関係を論じた重要な研究としては、次のようなものが挙げられる。Lajos Abafi, *Geschichte der Freimaurerei in Österreich-Ungarn*, 5 Bde. (Budapest, Original. 1890-9, Reprint 2001); Edith Rosenstrauch-Königsberg, *Freimaurerei im Josephinischen Wien: Aloys Blumauers Weg vom Jesuiten zum Jakobiner*. (Wien 1975); Éva H. Balázs, Ludwig Hammermayer, Hans Wagner, Jerzy Wojtowicz (Hrsg.), *Beförderer der Aufklärung in Mittel- und Osteuropa: Freimaurer, Gesellschaften, Clubs*. (Berlin 1979); Helmut Reinalter, *Die Freimaurer*, (München 2000)。

そこで本稿でも啓蒙の場としてのフリーメイソンについて整理しておきたい。

ハプスブルク君主国における啓蒙という文脈で第一に挙げなければならないのは、宗教問題である。対抗宗教改革の推進者でカトリックの守護者を自任してきたハプスブルク君主国では、イエズス会およびカトリック教会が絶大な力を所有しており、18世紀半ばに至るまでプロテスタントに対する迫害は続いていた。こうした中で啓蒙の課題となったのは、ルター以来の宗派対立の克服とすでにプロテスタントでは実現しているローマ教皇の影響圏からの離脱であった。イタリアのロドヴィコ・アントニオ・ムラトーリ¹⁰による過度の教権に対する批判は、オーストリアでも広く受容され、従来の信仰のあり方に対して、カトリック自身も自己批判を展開するようになった。カトリック啓蒙と呼ばれる教会内部で生じた刷新運動である。こうした動きはヨーゼフ2世の治世で政策的実現をみるようになった。

また、数々の啓蒙的施策を試みたヨーゼフ2世の改革の担い手となった人々のことを、ヨーゼフ主義官僚とよぶこともあるが、彼らにもハプスブルク君主国の啓蒙主義の特徴が色濃く反映されている。つまり、ハプスブルク君主国においては(啓蒙専制体制をとった多くのドイツ語圏諸邦でも同様の傾向が見られるが、)啓蒙主義と国家は対立関係にあるのではなく、協働関係にあったといえる。そして、多くの啓蒙主義者がフリーメイソンに所属していたことからフリーメイソンと国家との関係も必ずしも対立関係にあったわけではない。むしろドイツ語圏において、プロイセンのフリードリヒ2世が死に、ヨーゼフ2世のフリーメイソン勅令が発布される1786年ころまでは、国家とフリーメイソンの関係は協働関係にあることの方が多かったと考えられる。

2. ウィーンのフリーメイソン: イグナーツ・フォン・ボルン

ウィーンにおいて啓蒙主義とフリーメイソンをつなぐ人物を一人挙げるならば、イグナーツ・フォン・ボルン¹¹だろう。彼は、フリーメイソンの入会儀礼をコンセプトとしたモーツァルトの歌劇『魔笛』(Die Zauberflöte)の登場人物ザラストロのモデルとなったことでも知られる。まずは簡単に彼の経歴をまとめてみよう。ボルンは1742年12月26日にトランシルヴァニアのドイツ系貴族の家系に生まれた。幼年期、ボルンはトランシルヴァニアのカルルスブルクで過ごし、ラテン語を学び、おそらく1753年にウィーンに来てイエズス会系ギムナジウムに通った。1759年にイエズス会の修練士となるもその16ヶ月後にはイエズス会を飛び出し、後にヨーゼフ主義を支える官僚の一人となるヨーゼフ・フォン・ゾンネンフェルス¹²らと交わり、1762年から63年にかけてプラハで法学をおさめ、ドイツ、オランダ、フランス、スペインを跨ぐヨーロッパ旅行をおこない、帰国後は自然科学を学んだ。ボルンはマリア・テレージアのもとでは、鉱山の専門家として頭角を現すことになる。最初はプラハの鉱山管理局で顧問官として勤め、1777年にウィーンの硬貨鑄造＝鉱山管理管轄官廷官房の鉱山顧問に、1779年には宮廷顧問官となった。ボルンは官僚として成功を収めたといえる。ヨーゼフ2世の単独統治が始まり、ヨーゼフ主義的改革がおこなわれていくと、ボルンも論客の一人として改革支持の論陣を張った。また、鉱山学者としてもボルンが提案した混汞法(水銀と他の金属の合金アマルガムから金を採取する方法)はヨーゼフ2世によって1784年に正式に採用

¹¹ Ignaz Edler von Born (1742-1791): 伝記的情報については本文を参照のこと。

¹² Joseph Freiherr von Sonnenfels (1734-1817): モラヴィア南部のミクロフ生まれの官房学者、法律家。ミクロフのエスコラピオス修道会学校で教育を受けた後、1745年から49年の間、ウィーンで哲学と言語を学び、49年から54年までは、父の借金のために勉学を中断し、軍務についた。1754年にウィーンに帰還すると、カール・アントン・フォン・マルティニ(Karl Anton von Martini)とパウル・ヨーゼフ・フォン・リーガー(Paul Joseph von Riegger)の下で法学を学んだ。マリア・テレージア期には、拷問廃止運動に尽力し、1776年にテレージア法典で認められた拷問を廃止させた。ウィーン大学で長きにわたって官房学を教授する一方で、ヨーゼフ2世の下で教育や法律分野の顧問として活躍した。

¹⁰ Lodovico Antonio Muratori (1672-1750): イタリア、モデナ生まれの聖職者。モデナ大学で哲学、法学を修め、1695年にミラノのアンブロジーヨ図書館、1700年にモデナの文書館の司書となった。ムラトーリはイタリア啓蒙の先駆者として、歴史書として名高い『イタリア年代記』(1744-1749)を初めとするさまざまな著作を執筆し、後の世代(ベッカリーアなど)に影響を与えた。

され、オーストリアに導入された。晩年は度重なる実験による鉛中毒に悩まされ、1791年7月24日にウィーンで息を引き取った¹³。

ボルンのフリーメイソンとの関わりはおそらくプラハ時代に始まる¹⁴。1770年にプラハのロッジ「三つの戴冠された柱」(Zu den drei gekrönten Säulen)の職人であったことが確認されている。ボルンによってプラハで設立されたボヘミア知識人私設協会の多くのメンバーもこのロッジで活動していた。つまり、知識人協会とフリーメイソンの活動は不可分に結びついていたといえる。1777年にウィーンへ移住後、1781年にロッジ「真の調和」(Zur wahren Eintracht)が「戴冠された希望」(Zur gekrönten Hoffnung)から新しく分離設立されると、すぐにそれに入会した。ボルンはこのロッジの中で次第に中心的な役割を果たすようになる。入会2週間後に親方となり、1783年には主席親方に昇りつめ、その後このロッジはウィーンにおける存在感を飛躍的に伸ばすことに成功する。ボルンがこのロッジで目指していたのは、ウィーンに当時まだ存在していなかった学術アカデミーをフリーメイソンの中で実現することであった。1784年には、機関誌『フリーメイソン・ジャーナル』(*Journal für Freimaurer*)を創刊し、目下進行中の改革や普遍的な人類共通の課題について取り組むことを宣言した。また実際の活動として、ボルンは「修行ロッジ」(Übungsloge)を毎月開催することを提案し、実行した。「真の調和」のメンバーであったヨハン・ペツル¹⁵はこの修行ロッジについて次のよう

に述べている。

「11月の間、特定の日、公開講義がおこなわれるいわゆる修行ロッジが開かれた。3、4名のメンバーが歴史や道徳、哲学から取ってきた対象について、また古今の神秘や秘密結社の歴史について各自選択した論文を散文でも韻文でもそれぞれに読みきかせた。そしてこの論考は後でまとめて『フリーメイソン・ジャーナル』に転載された。しかしこのジャーナルはフリーメイソンに入会したものの専用であり、一度も市場で販売されなかった。修行ロッジにはそのような取り組みを好むあらゆるロッジのすべての同志たちが出席することができた。」¹⁶

この記述からもわかるように、「真の調和」ではワークショップ的な形式で学術的議論をおこなっていた。このロッジの声望はウィーンでも高く、多くの作家や芸術家、学者、音楽家がメンバーとなっていた。また、学術アカデミー的な要素として、このロッジは『フリーメイソン・ジャーナル』の他に『調和的な友人達の物理学的成果』(*Physikalische Arbeiten der einträchtigen Freunde in Wien*)という雑誌をウィーンで発行した。この雑誌には植物学から天文学に至るまで様々な自然科学分野の論文が掲載された。1784年4月30日にウィーンを訪問中のフリードリヒ・ミュンター¹⁷も

¹³ ボルンの経歴については、以下の文献を参照した。Helmut Reinalter, Ignaz von Born – Persönlichkeiten und Wirkung. In: Helmut Reinalter (Hrsg.), *Die Aufklärung in Österreich: Ignaz von Born und seine Zeit*. (Frankfurt am Main 1991), S. 11-32.

¹⁴ ボルンとフリーメイソンとの関わりについては以下の文献を参照した。Helmut Reinalter, Ignaz von Born als Freimaurer und Illuminat. In: Reinalter (Hrsg.), *op. cit.*, S. 33-67.

¹⁵ Johann Pezzl (1756-1823): バイエレンのマーラーズドルフ生まれの啓蒙作家。1768年から75年にかけてベネディクト修道会のリツェウムで学んだ後、1776年から80年までザルツブルクで法学を学んだ。1780年に『修練期からの手紙』(*Briefe aus dem Noviziat*)を出版し、教会批判をおこなうと、ザルツブルクには居られなくなり、学業を中断し、チューリヒに逃れ、専業作家としての道を模索する。1783年に厳しい検閲を避けるためにウィーンに移住し、1784年に宰相カウニッツの秘書兼司書を務める。彼はヨーゼフ主義者のサークルで交流を深め、政治を諷

刺した作品を残した。特に、フランスのメルシエの『タブロー・ド・パリ』を模倣して作った『ウィーンのスケッチ』(*Skizze von Wien*)は有名かつ有用な作品である。

¹⁶ Johann Pezzl, *Lebensbeschreibungen des Fürsten Reimund Montekukuli, des Fürsten Wenzel Lichtenstein, des Hofraths von Ignatz Born samt einem Portraite*. (Wien 1792), S. 235. cf. Reinalter, Ignaz von Born als Freimaurer und Illuminat, S. 45.

¹⁷ Friedrich Christian Karl Heinrich Münter (1761-1830): ゴータ生まれのプロテスタント神学者。幼少期に父バルタザールがデンマークのコペンハーゲンの主任説教師になるとともに、コペンハーゲンに移住し、ドイツ人家庭教師と父から教育を受けた。1778年に大学に入学し、哲学と神学を学ぶ。1781年にコペンハーゲンを出てゲッティンゲン大学にいき、そこで2年間勉学を続けた。1783年に故郷に帰り、翌年デンマーク王室の援助でイタリア、ドイツ、スイスへの旅行をおこなった。帰還後の1788年に『両シチリアについての報告』を出版した。また同年からコペンハーゲン大学で神学を教授した。1798年にデンマーク王立学術アカデミーのメンバーになった。1808年にはゼーラント修道院の司祭に任命された。

「真の調和」について次のように述べている。

「ボルンのロッジ全体が一種の学術アカデミーになっています。ウィーン在住でイルミナーテン結社の側に立つ頭脳あるすべての人々がこのロッジおよびゲミンゲンの（主催するロッジ）『慈善』に所属し、それを通じて公衆に非常にたくさん働きかけてきました。冬にボルンは正規の講義である親方修行集会（修行ロッジ）を開催する予定です。」¹⁸

フリーメイソンを啓蒙的な学術アカデミーとして機能させようというボルンの姿勢は、1780年代前半のウィーンのフリーメイソンの特徴とも言えよう。啓蒙の実践の場は確かにフリーメイソンの中に用意されていた。啓蒙主義運動は様々なアソシエーションを機軸にして展開していくものであるが、自由なアソシエーション活動が活発におこなわれていない地域においては、フリーメイソンおよびその支部がその代替となる言論空間を提供していた。そう考えると、ハプスブルク君主国においては、フリーメイソンこそが啓蒙運動の中心として機能していたとみていいだろう。しかし、こうした空気は長くは続かなかった。ヨーゼフ 2 世のフリーメイソン勅令がウィーンの活発だったフリーメイソン活動を収縮させた。

3. ヨーゼフ 2 世のフリーメイソン勅令

フリーメイソンにはウィーンで活躍していた知識人の多くが所属しており、彼らのソシアビリテの場を形成していた。また、フリーメイソンが持つその匿名性は知識人に非公式な発言の場を与えていたと考えられる。

ここで、ウィーンで指導的な役割を担ったロッジ「真の調和」を例にして、実際にフリーメイソンにどのような人々が所属していたのかを確認してみよう。「真の調和」のメンバーは全体で 225 名であるが、その構成は下図のようになっていた¹⁹。

職 業	人数	割合
国家行政職	53	ca. 24%
外交官、宮廷代理人	17	8%
教育および文化業	61	27%
医療関係者	13	6%
司法職	3	1%
軍人	36	16%
学生、実習生	4	2%
商工業	7	3%
民間企業職員	5	2%
金利生活者、情報なし	11	5%
労働者	15	7%

階 層	人数	割合
行政官吏	5	ca. 2%
宮廷および行政顧問官	15	7%
書記など	33	15%
公教育従事者	45	20%
聖職者や修道士など	23	10%
芸術家	9	4%

年齢	~29	30 代	40 代	50 代	60 代
人数	55	87	50	17	3
割合	24%	39%	24%	8%	1%

このような構成を見るとフリーメイソンが年齢的には 30 代、職業階層的には官僚や教育関係者を中心とした知識人の集まる場所になっていたことがよく分かる。ヨーゼフ 2 世は初めフリーメイソンを、改革を支え、世論に影響力を持つ機関として位置づけていた。フリーメイソンから派生したイルミナーテンとウィーンのフリーメイソンのロッジ「真の調和」のネットワークを利用して、ヨーゼフ 2 世はバイエルンとオーストリア領ネーデルラントを交換するという外交政策を達成しようとした。しかしそれが失敗し、バイエルンでイルミナーテンが弾圧を受けると、ヨーゼフ 2 世はこの組織を積極的に支援する理由を失った。それどころか、彼はフリーメイソンを陰謀の源のように

¹⁸ Reinalter, Ignaz von Born als Freimaurer und Illuminat, S. 51.

¹⁹ Hans-Josef Irmen (Hrsg.), *Die Protokolle der Wiener Freimaurerloge „Zur wahren Eintracht“ (1781-1785)*, (Frankfurt am Main 1994), S. 12f.

考えるようになったのである。ここで彼の発布したフリーメイソン勅令の内容について確認しておきたい。

ヨーゼフ 2 世は

「私はいわゆるフリーメイソンという結社の秘密について、かつてそのまやかし(Gaukelei)をあまり熱心に知ろうとしなかったのと同様に知らなかったのだが、フリーメイソンは増加の一途をたどり、いまやあらゆる小都市にまですでに広がっている²⁰⁾

とフリーメイソンの拡大傾向に触れた上で、

「このような集会が完全に放任され、何の指導も受けないなら、その放埒な活動は宗教、秩序、道徳にとって有害なものになる可能性がある。特に〔官庁の〕幹部たちが熱狂的に互いに密接に結びつくことで、おそらく自分たちと同じ結社に属していない部下に対する公正さが完全なものではなくなり、少なくとも〔結社の結びつきが〕私利私欲のために利用される可能性があるだろう²¹⁾

としてフリーメイソンに対する規制を行おうとしたのである。ただしヨーゼフ 2 世はこの勅令がフリーメイソンを弾圧するものでないことを強調している。

「フリーメイソンは、彼らの憲章や討議の内容もよくわからないのであるが、それでもやはり、善行を行っている限りは、国家の保護と庇護の下に置き、それゆえ彼らの集会は正式に許可されうる²²⁾

このように、勅令があくまでもフリーメイソンの保護と正式な承認を行うものであることを明記している。

また、この時点でヨーゼフ 2 世がフリーメイソンを弾圧しようとしていたと考えにくい理由として、1784 年にウィーンに大ロッジを建設させたこ

とを挙げることができよう。これ以後ハプスブルク君主国のフリーメイソンロッジはこのウィーンの大ロッジの管轄下に入ることになったのである。こうした行動の背景には、それまでのハプスブルク君主国内のロッジに厳守派²³⁾などの外国のロッジ、特にベルリンの大ロッジが強い影響力を持っていたことがあげられる。つまりハプスブルク君主国独自の大ロッジを持つことでその影響力を排除しようとしたのである。これは見ようによっては国内のフリーメイソンの保護とも映るものであった。フリードリヒ・ミュンターはウィーンの大ロッジ創設について次のように記している。

「ここではメイソンは仲が良いです。すべてのロッジがベルリンの大領邦ロッジから引き離され、それがおそらくよかったのでしょう。

〔中略〕あなたはすべての兄弟を本物だともっていますが、いまや 3 位階で活動していて、高位位階は認められておりません。ハンガリー、ボヘミア、オーストリア領イタリア、オーストリア領ドイツのあらゆるロッジがその大領邦ロッジの下にあります。その大親方はディートリヒシュタイン伯爵です。」²⁴⁾

ミュンターはハプスブルク君主国のロッジから厳守派の影響力を排除することがいい影響を与えるものだと考えている。

それではなぜ勅令が出されたのだろうか。ゲオルク・フォルスター²⁵⁾はクリスティアン・ゴット

²³⁾ Die Strikte Observanz: ザクセン出身の貴族カール・ゴットヘルフ・フォン・フント男爵が 1764 年頃に創設したフリーメイソンの儀礼。「厳守」という言葉には、上位者に対する絶対服従という意味が込められている。フントは高位位階がテンプル騎士団の秘密を握る重要な位階であり、これを「未知の上位者」から授与されたと主張した。そして、ジャコバイトの象徴であるチャールズ・エドワードを「未知の上位者」とした。こうしてフリーメイソン組織にテンプル騎士団とジャコバイトの伝説を導入し、権威主義的な階層秩序を作り上げた。厳守派の中では、テンプル騎士団伝説と絡んで、錬金術が積極的に推進された。その影響力はヨーロッパ中のフリーメイソンに広がった。1776 年のフント男爵の死後は、ブラウンシュヴァイク公フェルディナントが大親方となり、1782 年にヴィルヘルムスバート大会を開催し、フリーメイソンの起源についての議論などをおこなったが、その結果テンプル騎士団伝説の放棄が確定し、勢いを失った。

²⁴⁾ Ibid., S. 52.

²⁵⁾ Johann Georg Adam Forster (1754-1794): ダンツィヒ (現

²⁰⁾ Reinalter, Joseph II. und die Freimaurerei, S. 64.

²¹⁾ Ibid.

²²⁾ Ibid., S. 65.

ロープ・ハイネ²⁶に宛てた 1786 年 10 月 12 日の手紙の中で次のように述べている。

「私は〔ガリツィアの郡長官ガレンベルク〕伯爵を通じてオーストリアにおけるフリーメイソン改革の最初のきっかけが新しい帝国制度に反対するハンガリーでの秘密集会によって与えられたのだと知りました。つまり、この諸氏はフリーメイソン集会を言い訳に使って、抵抗的措置について協議していました。だから、法廷のある都市以外でロッジを設立することを禁じ、すべての集会を政府に事前に報告しなければならないという命令が出されたのでした。ところで、この経緯はウィーンでさえもフリーメイソンたちの間で大きな動揺の原因となりました。ボルンとゾンネンフェルスはこの件について完全に仲違いしました。ボルンはこの件についてとどまることのない不愉快な気分と怒りを抱いていました。メイソン組織の名声は完全に落ちてしまいました。」²⁷

つまり、フォルスターがガレンベルク伯爵から

グダニスク) 近郊のナッセンフーベン生まれの自然科学者かつ革命家。11 歳の時に父とともにロシアを旅行し、1766 年にサンクトペテルブルクからイギリスへ行き、1772 年から 75 年までのクック船長の第 2 回世界周遊に参加した。1777 年にロンドンでそのことを記した『世界周遊記』(*A voyage round the world*)を出版し、評判をえた。1779 年からカッセルで自然科学の教授となり、1784 年からはポーランド(現リトアニア)のヴィリニウス大学で教鞭を執った。1787 年にロシアの世界旅行の指揮者になる予定でポーランドを去ったが、この計画は水泡に帰した。1788 年にマインツで大学図書館司書となり、フランス革命勃発後、マインツが革命軍によって占領されると、1792 年に彼はジャコバンクラブに入会し、「ライン＝ドイツ国民公会」の副議長となった。議員としてパリへ向かい、マインツをフランス共和国へ併合させることを試みた。1794 年に病死するまで、フランスで言論活動をおこなった。

²⁶ Christian Gottlob Heyne (1729-1812): ケムニッツ生まれの文献学者。1748 年にライプツィヒ大学で学ぶ。1753 年にはドレスデンのブリュール図書館で写字生となった。7 年戦争の騒動によって職を追われ、1757 年から 60 年の間は家庭教師で生計を立てながら、翻訳業に取り組んだ。1763 年にゲッティンゲン大学に招聘され、1809 年に辞職するまで修辞学を教授した。ドイツ語圏各地で教育改革活動もおこなった。

²⁷ Reinalter, *Joseph II. und die Freimaurerei im Lichte zeitgenössischer Broschüren*, S. 17.

聞いた話によると、ハンガリーにおける行政改革²⁸に対する抵抗運動がフリーメイソンを隠れ蓑におこなわれており、それに対する対抗措置として勅令が發布されたということになる。ヨーゼフ 2 世にとってこのような政治的な地下活動の温床となりうる組織を野放しにしておくことはできなかったと考えられる。

こうした理由が背景にあるために、ヨーゼフ 2 世のフリーメイソン勅令からは知識人の私的空間を国家の監視下に置くという知識人の言論に対する強力な規律化の意志が読み取れるのである。フリーメイソン勅令には 4 項にわたってフリーメイソンが遵守すべき指示が記されている。ロッジの数を厳しく制限し、集会開催日の報告を義務づけ、違法に集会を開催すれば、ギャンブルに科せられる罰則と同様の罰が科せられることになった。領邦都市のロッジの長は領邦長官に全ての構成員の名前とその地位と肩書きを掲載したリストを提出しなければならなかった。またそのリストには 4 半期ごとに新しいメンバーの受け入れの増減を書き加え、フリーメイソン内での肩書きや称号を補足して述べなければならなかった。こうしたヨーゼフ 2 世の措置に対して知識人の側も激しく反発した。フリーメイソン勅令はそこに所属する知識人たちの私的空間を侵すものであったので、当然この勅令は大きな反響を呼ぶものとなった。以下、ウィーンで出版されたパンフレットに基づいて、フリーメイソン勅令がウィーンでどのように受け止められたかを考察したい。

4. パンフレットに見るフリーメイソン勅令—皇帝批判の開始

フランツ・クラッター²⁹はこの勅令に即座に反応し、匿名で『ウィーンにおける最新のメイソン革命についての 3 通の手紙。プラハで一般に認め

²⁸ 1785 年にヨーゼフ 2 世はハンガリーの伝統的な行政単位であった「県(コミタート)」を廃止して、画一的な州行政区を導入した。このあたりの経緯については H・バラージュ・エーヴァ(渡邊昭子、岩崎周一訳)『ハプスブルクとハンガリー』成文社、2003 年を参照のこと。

²⁹ Franz Kratter (1758-1830): シュヴァーベン地方のオーバードルフ・アム・レヒ出身の劇作家。シュヴァーベンのディリンゲンで哲学と神学を学んだ後にウィーンで秘書として雇われながら、法学を修めた。1791 年からはガリツィアのレンベルク(現リヴィウ)の劇場監督になった。

られている潔白のために1人のフリーメイソンに宛てて』(*Drey Briefe über die neueste Maurer-Revolution in Wien. An einen Freymaurer zur anerkannten Unschuld in P.*³⁰)を出版した。この作品はタイトルの通り3通の手紙から成っているのだが、その12月18日付になっている第1通目の冒頭で「根本的にこの勅令はメイソンの避けがたい没落につながるものだろう」³¹とそのインパクトの大きさについて述べている。

また彼は「僕がまだこれから心のうちで真のメイソンであり続けたいと思うのなら、自らをメイソンとして示すことをこの瞬間で止めなければならない」³²と勅令に対し強い拒絶の姿勢を示す。さらにクラッターは伝統的な3位階制を保持するヨハネのロッジと高位階システムとの対立をはらんでいたフリーメイソン内部に危惧を抱いている。「権勢欲のある同志たちはここで、彼ら自身の手で取り計られる待望の機会、つまりあらゆるメイソンを自らの誇りやうぬぼれ、個人的な目的に応じた姿に作り変える機会をつかんだのだ。」³³ここで示されるクラッターの危惧は、勅令それ自体よりもフリーメイソン内に存在する高位階制度を導入しようとする権勢欲のある同志であった。ではいったい権勢欲のある同志とはどのような人々なのか。彼はその代表として従来のロッジを統合してできた新たな3つのロッジのマスター（この中にはボルンも含まれる）を挙げ、彼らを痛烈に批判していく。彼の批判は勅令を發布した皇帝ではなく、この勅令によって成立した新しいロッジの責任者へと向けられるのである。

ただし、勅令の中の「まやかし」という言葉にはクラッターは次のように敏感に反応している。

「知りもしないことや知る必要もないこと、あるいは最終的に有用で公共の保護にふさわしいと思われるものをどうやってまやかしなどと呼べるだろうか？」

諸侯も大臣も王も皇帝も、偉大な知識人も偉大な芸術家もそして真の慈善家の目の中に

いまだに存在するもの、高貴な人々も自らの原則を厳格に行使した啓蒙思想家もそのようなまやかしをおこなうものなのだ！

このようなまやかしを行うものたちが貧民を助け、貧困の涙を拭い去り、孤児を養育し、才能あるものを教育し、芸術と学問を向上させ、神聖な計画を立て、有用な提案をおこなってきたのだ。気高くみな利益になるような類いの法は、間接的に世俗のものにまだ知られていない方法によってこのようなまやかしをおこなうものたちがきっかけを作ってきたが、あれ以来あまり発布されないだろう。

出版の自由や寛容、宗教改革などはこのようなまやかしの産物とは違うものなのか？」³⁴

このように勅令の中で用いられた「まやかし」という表現を痛烈に批判したのである。このクラッターの批判は皇帝を直接批判するものではないにしる、皇帝批判へとつながる要素を持つものであった。

この「まやかし」という言葉に同じく反応したものとして、アーロイス・ブルマウアー³⁵の匿名パンフレット『まやかしとは何か？あるいはむしろ何がまやかしではないのか？1785年12月17日に現れたフリーメイソンに関する勅令に対する時事作品』(*Was ist Gaukeley? oder vielmehr Was ist nicht Gaukeley? Eine Gelegenheitsschrift, da ein K.K. Patent den 17. Dez. 1785. Die Freymäurer betreffend zum Vorschein kam.*³⁶)がある。ブルマウアーの論調はクラッターよりもはるかに激しいものである。

「言ってみてくれ！まやかしとは何か？あるいは、むしろこの地球上で何がまやかしでないのか？金羊毛とは何か、十字架とは何か、

³⁴ *Ibid.*, S. 67.

³⁵ Alois Blumauer (1755-1798): オーバーエスタライヒのシュタイアー出身の作家、詩人。イエズス会の学校で教育を積み、イエズス会士となるが、イエズス会の解散後、1774年ころにウィーンへ移住した。1780年にゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵によって宮廷図書館に職を斡旋してもらい、1782年からは検閲官のひとりとなり、1793年にジャコバン派の嫌疑を受けて解雇されるまで検閲官として働いた。1787年からは書籍業にも手を出したが、事業に失敗し、破産した。

³⁶ Reinalter, Joseph II. und die Freimaurerei im Lichte zeitgenössischer Broschüren, S. 84-89.に収録

³⁰ Reinalter, Joseph II. und die Freimaurerei im Lichte zeitgenössischer Broschüren, S. 66-72.に収録

³¹ *Ibid.*, S. 66.

³² *Ibid.*, S. 67.

³³ *Ibid.*, S. 68.

「勲章を佩びるのに用いる」大綬とは何か、王冠とは、王勺とは、世界中の表面上金ぴかのものはいったい何なのか？これらのものは常にその内部の偉大さの紛れもない永遠の証なのか？本当に、君がまやかしと偽証した「フリーメイソンの」自由の儀式や印と同じくらい「内部の偉大さが」少ない、いやそれよりもはるかに少ないといえるのか？一宗教と国家には、このような理解において受け入れられた、千のまやかしがあるのだ。[中略] 試みてくれ！君がこの「まやかしという」表現で、まさに君がその偽善者になる努力をしていることを侮辱したことがわからないのか？君はヨーゼフ大帝をまやかし屋の息子 (Gauklerssohn) とけなさないのか？君は彼の父フランツ³⁷よりも品格のある自由を心得ているのか？」³⁸

ここでは王の権威を示すものもまやかしとして挙げられており、このパンフレットにはヨーゼフ 2 世に対しての痛烈な皮肉が含まれていた。しかし、その一方でブルマウアーはフリーメイソン勅令を賞賛する詩『ヨーゼフ 2 世、フリーメイソンの守護者』(*Joseph der Zweyte, Beschützer des Freymaurerordens*³⁹)を自分の名前を付して発表している。この矛盾は検閲官として国家の禄を食むブルマウアーの立場を象徴するものであった。

翌年の 1786 年、クラッターのパンフレットの他にもフリーメイソン勅令について論じたパンフレットが次々と出版された。王党派知識人であるヨハン・ラウテンシュトラウホ⁴⁰は『フリーメイソンに関する勅令についての総合的な叙述と評価』(*Gesammelte Bemerkungen und Urtheile über die k.k. Verordnung in Ansehung der Freymäurer, und ihren*

Orden überhaupt.⁴¹)を出版した。このパンフレットは 4 部構成であり、それぞれの部で大衆、聖職者、理性的な人物、女性といったフリーメイソン部外者がフリーメイソン及びフリーメイソン勅令に抱いていた感情や考えを考察している。ラウテンシュトラウホは序文で次のように述べている。

「最重要な国家変革の一つでもこの命令「フリーメイソン勅令のこと」より大きな注目を集めることは難しかっただろう。フリーメイソン関係者も部外者も仰天している。ものをよく考える人も考えない人も、聖職者も庶民も、気取り屋も色っぽい人も、女性も少女も突然彼らが知りもしない対象について話し始めたために、フリーメイソンはいっぺんに何の区別もなく好きなように駆けていく公衆のおもちゃになってしまった。」⁴²

この箇所から勅令がフリーメイソンを公衆の議論の対象へと押し上げたことがわかるだろう。

第一に大衆について確認してみると、「庶民の目から見るとフリーメイソン結社が昔からずっとえせ宗派にほかならないと見なされていたことはよく知られた事実⁴³」であり、「完全な断言にもかかわらず、『フリーメイソンの集会が国家の保護と庇護下におかれる、うんぬん』という命令は『この結社の完全な廃止や破壊』というふうに見なされ⁴⁴」、この「勅令は群集にとってメイソンたちの狂気の証明⁴⁵」になった。ラウテンシュトラウホの分析によると、大衆がそのような結論に至る原因は勅令の「陛下はいわゆるフリーメイソンという結社の秘密について、かつてそのまやかしをあまり熱心に知ろうとしなかったのと同様に知らなかった⁴⁶」という部分にあった。この箇所はヨーゼフ 2 世がフリーメイソンではなく、その秘密についてもその信条についても大衆に知らせることができないことを示していただけでなく、フリーメイソンの集会の中で本当の「まやかし」がお

³⁷ ヨーゼフ 2 世の父フランツ 1 世のこと。フランツ 1 世は、自身もフリーメイソンであり、マリア・テレーシアの反対にもかかわらず、ハプスブルク君主国内のフリーメイソンを保護した。

³⁸ *Ibid.*, S. 85.

³⁹ *Ibid.*, S. 79-81. に収録。

⁴⁰ Johann Rautenstrauch (1746-1808) : エアランゲン生まれの作家。法学をウィーンで学び、法学修士となるが、執筆活動を主におこなって生計を立てていた。ヨーゼフ 2 世の単独統治期には改革擁護の論客として頭角を現し、政府からの依頼でパンフレット執筆をおこなうこともあった。

⁴¹ Reinalter, *Joseph II. und die Freimaurerei im Lichte zeitgenössischer Broschüren*, S.72-79. に収録。

⁴² *Ibid.*, S. 73.

⁴³ *Ibid.*, S. 74.

⁴⁴ *Ibid.*

⁴⁵ *Ibid.*

⁴⁶ *Ibid.*, S. 75.

こなわれているということを示しているというのである。したがって、フリーメイソンを警察の監視下に置き、衆目に触れるものにする勅令は衆目の目には好意的に映っていたという結論に至るのである。

第二に聖職者に関する分析では、彼はまず聖職者を狂信的な者たち(*die Zelotenschaar*)とわずかな人数ではあるがよく考えている理性的な人たち(*die gutgesinnten Vernünftigen*)、そして陰でこそこそとしている人々(*die Schleicher*)の3つに分けて考えている。ラウテンシュトラウホによれば、狂信的な者たちはこの勅令を喜び、本当の庶民と同じように歓迎し、理性的な人たちはこの勅令を真のメイソンが長年募らせてきた望みを満たすものとして評価し、陰でこそこそとしている人々はこの勅令にまったく満足しなかったという。

第三にラウテンシュトラウホは「人間の幸福とそれを目指すことを評価し、愛す、理性的な人物はみな、フリーメイソン関係者でないにもかかわらず、フリーメイソン結社の崇拝者である⁴⁷⁾」とした上でフリーメイソンのすばらしさについて強調する。この理性的な人物の判断を記述した3部には、ラウテンシュトラウホが自らを理性的な人物と位置づけているために、彼の主観的意見が強く反映されている。最終的に理性的な人物は「結社に古き輝きとかつての尊厳を得る機会をその手に与えたヨーゼフの命令を喜んで⁴⁸⁾」のである。おそらくこれはフリーメイソン勅令の中にある国家による保護という要素を好意的に評価したものであろう。また、ラウテンシュトラウホは他のパンフレットで批判対象となった「まやかし」というヨーゼフ2世の表現も、千年来、宗教の聖域から少なくとも今日の職人ギルドまであらゆる秘密のあるいは公の集会と結びついている様々な「儀式や慣習」を表したものとして受け入れている。

ラウテンシュトラウホは面白いことに最後のカテゴリーとして女性を取り上げている。ここでは女性がフリーメイソンの秘密に対して強い関心を抱いている様子が描かれている。また女性が「新聞に掲載された陛下の命令によってフリーメイソ

ンが本当に廃止されたのか許されたのか」、「フリーメイソンは魔法使い(*Hexenmeister*)なのか、あるいはトレジャーハンター(*Schatzgräber*)、錬金術師(*Goldmacher*)、はたまた自由思想家(*Freigeister*)なのかどうか」、「自分たちの尊敬する男性や情夫、愛人がこのような結社に属しているのかどうか」といった疑問を抱き、この勅令によって混乱している様子が示されている⁴⁹⁾。この第4部に書かれていることが事実であるならば、フリーメイソン勅令は社会全体を揺るがすセンセーショナルな話題を提供したといえるだろう。

ラウテンシュトラウホが示した世界はヨーゼフの勅令を基本的に受け入れている。つまり、ラウテンシュトラウホはフリーメイソン勅令を擁護する立場でこのパンフレットを出版したと考えられる。特に理性的な人物と勅令への支持とを結びつけることで、彼はこの勅令が理性的なものであり、人類の幸福を目指すものであることを示そうとしたのであった。ラウテンシュトラウホと同様に勅令を擁護する立場でパンフレットを出版した人物はほかにもいる。レーオポルト・アーロイス・ホフマン⁵⁰⁾である。彼は『ウィーンのフリーメイソンに関して実直な人から実直な人に宛てた手紙』(*Briefe eines Biedermannes an einen Biedermann ueber die Freymaurer in Wien.*⁵¹⁾)を出版し、フリーメイソンの現状を暴露した。そこに描かれていたのは内部の党派対立や錬金術などの神秘主義の流入などの荒廃したフリーメイソンの姿であった。つまり、ホフマンは勅令発布の原因をフリーメイソン内部の墮落に求め、この墮落を是正するものとして勅令を擁護したのであった。

ヨーゼフ2世のフリーメイソン勅令に対して、

⁴⁹⁾ *Ibid.*, S. 79.

⁵⁰⁾ Leopold Alois Hoffmann (1760-1806) : ボヘミア北部のニーダーヴィッティヒ出身の作家。プレスラウのイエズス会学校で教育を受けた後、作家活動を始める。1778年から81年にかけてはプラハで、1782年からウィーンで活動を開始した。1785年から90年まではペシュトで、90年から93年まではウィーンでドイツ語と文学の教師としても働いた。当初はフリーメイソンや啓蒙主義に共鳴していたが、特にフランス革命後は保守化し、フリーメイソンに関する暴露本や誹謗文書を書き残した。1790年以降皇帝レーオポルト2世の恩顧を受け、ウィーンの言論界に影響力を誇ったが、皇帝の死後、影響力を失った。

⁵¹⁾ Reinalter, *Joseph II. und die Freimaurerei im Lichte zeitgenössischer Broschüren*, S. 126-136.に収録。

⁴⁷⁾ *Ibid.*, S. 77.

⁴⁸⁾ *Ibid.*, S. 78.

全面的に賛成もしなければ、非難もしない中間的な立場をとった人物もいた。それはヨーゼフ・リヒター⁵²である。彼はフリーメイソン勅令に反応して、『ウィーンにおけるフリーメイソン革命についての天国からの手紙』(*Briefe aus dem Himmel über die Freymaurerrevolution in Wien.*⁵³)を2回にわたって出版した。このパンフレットはすでに死んでしまった人物から現在生きている実際の人物に宛てたとされる手紙（むろんリヒターが死者に成り代わって書いた手紙であるが）を収録したもので、全6通から構成されていた。この中でリヒターはヨーゼフ2世やボルンに対して控えめな要求を提示しており、乖離しつつあったフリーメイソンに所属していた知識人とヨーゼフ2世をつなぎとめようとした。

以上見てきたように、フリーメイソン勅令をめぐる議論からは、ウィーンのフリーメイソンの中にも皇帝の政策を批判するもの、皇帝に忠実な王党派的なもの、皇帝とフリーメイソン（知識人）を仲介しようとするものがいて、個人の立ち位置によって立場が異なることが見てとれる。こうした立場の違いは1780年代後半になればなるほど先鋭化していく。

おわりに

本稿では、フリーメイソン勅令をめぐる言論を軸にしながらハプスブルク君主国におけるフリーメイソン勅令がウィーンにおける批判的公共圏の成立にどのように関わっていたのかを明らかにしてきた。ウィーンの啓蒙主義者の多くが国家に従属する官僚という立場にあったことは、政治批判に一定の限界を設けていたが、「秘密結社」であるフリーメイソンは、こうした啓蒙主義者に自由な言論の場を提供する機能を担っていた。こうした意味ではハプスブルク君主国において啓蒙知識人

が自由に意見を交換する私的言論空間はフリーメイソンを中心に発展してきたといえる。これに対してフリーメイソンの秘密性をぬぐいさり、国家の管理のもとに置こうとしたフリーメイソン勅令は、言論統制（紀律化）を志向するものであった。しかし、本稿で見てきたようにフリーメイソン勅令をめぐる一連の議論は、公の場で皇帝の政策を直接的に論じることが可能になったことを示している。つまり、フリーメイソン勅令はヨーゼフ2世が知識人の私的言論空間を国家監視の下に置こうとした「言論紀律化政策」の一つであったにもかかわらず、検閲の緩和が担保していた公共の言論空間においてむしろみずからの政策に対する批判的な言説を生み出すとともに、公共空間に引きずり出されたフリーメイソンロッジに代わって、本当の意味で地下活動をおこなうより過激な秘密結社の活動を促すことにつながったと考えられる。こうした意味で、ウィーンのフリーメイソンを揺るがしたフリーメイソン勅令は、ヨーゼフ期の公共的な言論空間を批判的公共圏へと転換させ、私的言論空間では批判の過激化を促進させる画期となったといえる。

(UEMURA TOSHIRO・獨協大学)

* 本研究の内容の一部は JSPS 科研費課題番号「24720336」、「24242003」の助成を受けたものである。

* 本稿は2016年刊行予定のヘルムート・ラインアルター『フリーメイソンの歴史と思想』増谷英樹、上村敏郎訳、三和書籍に寄せた解説を大幅に加筆修正したものである。

⁵² Joseph Richter (1749-1813): ウィーン生まれの作家。イエズス会系の学校で学ぶが、大学で学んだ形跡はない。1775年に詩集を出して以来、執筆活動に励み、1778年に執筆した劇作『野原の水車小屋』はヨーゼフ2世の絶賛を受け、ウィーン国民劇場で12回も上演されるヒット作となった。1779年に為替裁判所官吏になった。ヨーゼフ2世の単独統治期には数多くのパンフレットを出版した。ヨーゼフ2世の死後は秘密警察から資金を受けた形跡も残っており、政府のプロパガンダ作品に従事した。

⁵³ Reinalter, *Joseph II. und die Freimaurerei im Lichte zeitgenössischer Broschüren*, S. 89-103.に収録。